

## 第8回「オリアム随筆賞」

### 【泉大津市長賞】

#### 母のセーター

堂山伊央・泉大津市

母は冬になるといつも編み物をしていた。幼児期には真っ赤なセーター。学童期にはリボンの付いた洒落たセーター。中学時代にはリブ編みのセーター。私の洋服箆笥にはいつも母の手製のセーターがあった。私は母のセーターと共に育った。

そんな私がどうしても着られないセーターがある。母が病床で編んだ最期のセーターである。

私が二十六歳の夏。母は癌と宣告された。腫瘍の大きさは十センチ。進行性の咽頭癌だった。突然の入院。放射線治療に抗癌剤治療。私達家族にとつて、つらい夏となった。そんな病床にあつても、私が見舞いに行くと、母はいつも微笑んでいた。

抗癌剤治療が功を奏し、母は日常生活が送れるまでに回復した。その年の冬も母は編み物をしていた。しかし、そんな幸せな日々は長くは続かない。半年後には再発を告げられたのだ。私達家族に残された時間は半年。あまりに残酷な余命宣告だった。

母は延命のため、声帯摘出手術を受けた。そして手術終了とともに、声を失った。大きな母の声をもう二度と聞くことができない。母の前では懸命に笑顔を取り繕ったが、病室を出ると涙が止まらなかった。

母が声を失ってからは、私は筆談で母と話をした。「お仕事はどうだったの。」「今日は昼食に何を食べたの。」「たわいのない母との談話が私達の和みのひとときだった。

そんなある日、母は私にメモを手渡した。そこには、母の字でこう書かれていた。「毛糸をたくさん買ってきてほしい。編み針も持ってきてほしいの。」母の真意も分からぬまま、私は毛糸を買いに走った。そして家から編み針を持ち出し、母の病室へと向かった。

その日から、母は黙々とセーターを編み始めた。「最初に編むセーターはあなたの分。二番目のセーターは離れて暮らすあなたのお姉さんの分。三番目に編むセーターはお父さんのセーターよ。」

母は大好きな家族一人一人のために、最期のセーターを編み始めたのだった。

「そういえば、高校生になった頃から、母のセーターを着なくなったなあ。」好きなメーカーの服ばかり着るようになっていた。私はセーターを編む母の姿を見ながら少し切ない気持ちになった。

抗癌剤治療の副作用で意識が朦朧としている時もあった。それでも、母は気力の限り、セーターを編み続けた。一着。二着。三着。そんな母の気力には、医師も周囲もただ驚かされるばかりだった。母は二人の娘と夫に一着ずつ、お揃いのセーターを残した。そして編み終

えた一週間後に五十七歳の若さで旅立った。

母から私への最期のプレゼント。私はそのセーターを着ることができず、箆笥にしまい込んだ。

母の旅立ちから六年目の冬。私のお腹に新しい命が芽生えた。

私は母の死後、初めて箆笥の引き出しを開け、母のセーターを手にした。母のセーターは私に語りかけた。「あなたもいよいよお母さんになるのね。天から見守っているわよ。」

私は編み物ができない。でも、お腹の赤ちゃんに何か作ってあげたかった。慣れない裁縫針を手に、私はお腹の中の我が子へスタイを作り始めた。スタイを作りながら、母の温かさを肌で感じていた。

2児の母となった今、私は病床でセーターを編んだ母の気持ちが少し分かった気がする。母は知っていたのだ。たとえ、肉体は無くなるうとも、魂は心の中に生き続けるということ。声が出せなくなった母は、思いの限りをそのセーターへ託したのだった。「強く生きなさい。お母さんがいなくても、あなたはもう大丈夫。」母のセーターは私にそう語りかけるのだった。

今、上の子は四歳。下の子は生後八ヶ月。育児に奮闘中の日々である。私は育児に悩んだ時、母のセーターを目にする。「悩まなくてもいいのよ。自信を持ちなさい。」母のセーターは私を勇気づけてくれる。

育児中の時間を利用し、私はこの冬、編み物を始めた。まだ母のようにセーターを編むことはできない。子供のマフラーを編むのがやっとだ。だが、母が私に伝えてくれたように、私は我が子への愛情を、手作りの温もりを伝えたい。

そして我が子が少し大きくなった時、セーターを見せながら、我が子に語るつもりだ。「あなた達のおばあちゃんは、編み物が上手だったのよ。セーターのように温かい心の持ち主だったのよ。」と。